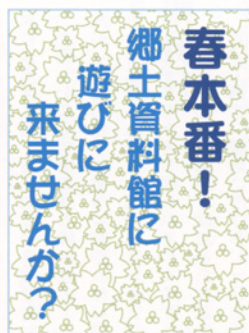


かたりべ 89

豊島区立郷土資料館だより



博物館の常設展示室は、その地域の歴史や文化を知ることができる格好の場所です。展示を見ている時、私たちはその時代や空間にタイムスリップしたような感覚を味わうことができます。「いつもでも見られる」常設展示室は、博物館を初めて訪れる方にとって貴重な学びの場といえるでしょう。

その一方、博物館をよく利用される方からは「いつもでも同じ展示」というご意見も耳にします。固定展示が多い常設展示の課題といえます。

郷土資料館は、一九八四年六月に開設して今年で二四年目を迎えます。常設展示室も老朽化が目立ち、本格的なリニューアルが必要な時期ですが、まずは出来ることから少しずつ改善していきたいと思えます。春本番！お花見のついでに、ちよつと模様替えした郷土資料館に遊びに来てみませんか。

(横山)



◆田島家長屋門にあつたもの
千早三丁目の田島家長屋門にあつた農具や生活資料を紹介しています。



◆大坂屋染物店の藍染と花見の名所
藍染屋(紺屋)の資料と、ソメイヨシノ・ツツジの名所を紹介しています。



◆お休みどころ
見やすくなった刊行物コーナー
鬼子母神の境内をイメージした東屋の長椅子に腰かけて、ゆっくりご覧ください。



◆学童疎開
山形県に集団疎開した児童の日記や手紙などを展示しています。(2ページ参照)

『豊島の集団学童疎開資料集』(9) ことができました。

この本は「日記・書簡編Ⅳ」として、

長崎第二国民学校（現・要小小学）と長崎第三国民学校（現・椎名町小学校）の関係の日記・手紙などを掲載しています。

豊島区の家を速く離れて、山形へ

学童疎開とはなんですか。大都市の子どもたちを、国民学校（現在の小学校）ごとに、地方へ移すことです。アジア太平洋戦争の末期、一九四四年（昭和一九年）八月、米軍による日本への空襲にそなえて行われました。それぞれの家庭が親戚などを頼って行くという、それまでの縁故疎開

では、十分ではなかったのです。

集団疎開は、大都市の三年生以上を対象にしてみました（翌年、全学年にひろがります）。豊島区の疎開先は長野・福島・山形の三県で、そのうち山形県へは、長崎・長崎第二・長崎第三と東京第二師範附属の各国民学校が向かいました。

イモ煮会、スキー、学校工場、兵隊さん送り、英霊むかえ

日記六冊分を掲載させていただいた岡佑子さん（当時、長崎第二校四年生）は寒河江町（現在は寒河江市）に集団疎開しました。日記には寒河江での暮らしぶりや疎開先で思ったこと・考えたことなどがくわしく記されています。

山形の秋の風物詩であるイモ煮会での歓迎に始まり、冬は長岡山でのスキー、夏には寒河江川や最上川での水遊びといった楽しいこともありました。それとともに、日記の中では戦争に勝つために自分たちはどうしなければならぬかということがくりかえし綴られています。

男でないのが残念だ。けれども女だつて、工場に、戦地に行ける、一日も早く、おおきくなりうんと勉強して、お国のために役立つちたい。

疎開先の学校には東京の工場が来て、校舎が削られます。また、寒河江の町からも次々と兵隊さんが出発し、戦死した町民が英霊として迎えられます。日記にはそうした記事が連続して出てきます。

二階から出入をする豪雪の地で

長崎第三校から楢岡町（現在は村山市）へ疎開された田村多喜子さん（当時五年生）には日記二冊のほか、ご家族のお手紙や記録などを提供いただきました。疎開間もなくの、日記の記述です。

何でもないのでない。早く家に帰りたいのです。ですからはやく戦争に勝つために今日近所の愛宕神社に行つた。戦争に勝つことが目的とされる日々が続いたのです。楢岡は豪雪の地で、学寮である旅館では冬になると二階から出入をしていました。二階の入口から冬の間に落とした服や弁当箱が春になってから出てきたという記事もあります。同じ長崎第三の疎開先だった隣の東根に歩いて温泉に行きます。けれど、「かへりは、やはりつらかつたがこの前より



疎開出発の日（田村多喜子氏提供）

（青木）

①資料集の内容

I 岡 佑子日記（六冊）

II 田村多喜子日記・書簡・携帯品目表など

- (1) 田村多喜子日記（二冊）
- (2) 書簡
- (3) 携帯品目表
- (4) 寮母志望者への通知書
- (5) 寮母会議記録
- (6) 寮母日誌

なお、付として田村さんのお父さんの日記の関係部分の抄録も掲載しました。

（二八一ページ、八〇〇円）



寒河江町菊乃家学寮で（菊乃家提供）

『豊島新聞』創刊号

三八〇タイトル、新聞類約一万八〇〇
〇タイトル、図書約七万三〇〇冊その他という膨大なもので、占領期の日本社会を研究する上で貴重な史料となつています(もちろん、GHQの検閲を研究する上でも重要です)。

これまで、実物を見ることの出来なかつた豊島区の地域新聞「豊島新聞」の創刊号が国立国会図書館憲政資料室所蔵のブランゲ文庫マイクロフィルムの中にあることが分かりました(原資料は、米国メリーランド大学所蔵)。

ブランゲ文庫

占領期の雑誌・新聞の宝庫!

はじめにブランゲ文庫について述べます。敗戦後、日本を占領した連合軍総司令部(GHQ)事実上アメリカの軍独統治(治)した)は、日本の「民主化・非軍事化」という占領目的の遂行のために、日本で発行される新聞・雑誌や図書などの検閲を行ないました。軍や内務省などの国家統制から自由になった日本の出版は、今度はGHQの統制下におかれることになりました。ブランゲ文庫とは、この検閲のために提出された出版物を、GHQで戦史編さんにあつたゴードン・W・ブランゲの努力によつて、検閲制度の終了後、メリーランド大学に移管したものです。各種団体や同人誌など地域や職場の末端までをふくむ雑誌約一万

『豊島新聞』創刊号は一九四八(昭和二三)年二月二八日の日付になっています。戦後日本の転換点の一つとなるアメリカ政府の対日「経済安定九原則」がGHQによつて発表されたのは、この直前、二月一八日のことでした。

『豊島新聞』創刊の言葉

一面に掲載されている「創刊の言葉」は「ミリタリズムが完全にたたきめされて、デモクラシーの世の中になつた」で始められています。続けて、民主主義といえども、国民が無気力・無自覚であつては根付かないということ述べて、

我社はここに思を潜め与えられた民主主義を、一人一人が自らの手でしっかりと把握するための、平和日本文化日本建設の為の言論機関として、旬刊「豊島新聞」を企画、既に其準備も成つて愈々区民各位と相見えることになつた

として、創刊当時の豊島新聞社の陣容は、社長が竹内雷男、編集部長兼営業部長が吉長邦司、編集主任が花岡謙二、それに編集部員一人、営業部員二人となつています。

創刊号の紙面から

一面トップは「三越、伊勢丹も進出/池袋駅周辺の整理/区画整理決定近く断行/マーケットも二月除去」というものです。マーケットとは、郷土資料館の展示にもある闇市のことです。

二面で大きく扱われているのは、新しい選挙関係の法律の解説です。「理想選挙への途開く」として立会演説会や政見放送などの選挙公営化、金のかららない選挙をうたつています。二月二三日に衆議院が解散され、一月二三日には総選挙が予定されていきました。他には「盛り上がる女性の意欲/豊島区婦人協議会」などの記事があります。

◆ ◆ ◆

国立国会図書館憲政資料室のブランゲ文庫マイクロフィルム資料にはこの「豊島新聞」創刊号から三五号(一九四九年一月九日)までが収録されています。

備も成つて愈々区民各位と相見えることになつた

三越 伊勢丹も進出
池袋駅周辺の整理
区画整理決定近く断行
マーケットも二月除去
百業店進出
区民中会
創刊の言葉

『豊島新聞』創刊号

【報告】豊島区の「ぐみひも」世界へ紹介

第一回組紐国際会議

■「かたりべ」第88号の表紙で少し紹介しましたが、当館には羽織紐と帯締めが豊富に収蔵されています。これらは、糸を「組む」という技法によって生まれたもので、まず一九九四年に、次に一九九九年に展示会を開いてからは、区民の方をはじめ他地域の組紐愛好者や研究者、職人にも知られるようになってきました。このたび、これまでのことがきっかけとなり、二〇〇七年一月二日から一



愛好者のために椅子用の丸台も

六日まで、京都工芸繊維大学（京都市左京区）で行われた第一回組紐国際会議に参加し、館蔵資料の羽織紐と帯締めを紹介する機会をいただきました。また、世界各地の組紐研究の現状を知ることでもきました。筆者は、発表を含め二日間という短期間の参加でしたが、館蔵資料の組紐を多くの人に見ていただき、また、館蔵の組紐の技術的・美的価値が高いものだという思いを深くすることとなりました。参加国は、アルゼンチン・オーストラリア・カナダ・フランス・ハンガリー・オランダ・ニュージーランド・南アフリカ共和国・イギリス・アメリカ合衆国、そして日本と、さまざまな国の方が来日され、プログラムによれば、参加人数は約一四〇名（日本は約九〇名）でした。

■世界各地には、諸民族が伝統的に培ってきた組紐文化があります。よく知られているところではアンデス地方やアジアの少数民族にあります。しかし、今回はその国や地域の独特な組紐ではなく、日本の組紐が、世界各地に伝播しているという現実を目の当たりにすることができたのです。会議の内容は、実技講習・講演と研究発表・作品公開に分けて実施されました。ここで紹介する写真は、実技講習の場面です。初めて組台に向かう人、



むずかしい唐組台に向かって

本が、世界各地に伝播しているという現実を目の当たりにすることができたのです。会議の内容は、実技講習・講演と研究発表・作品公開に分けて実施されました。ここで紹介する写真は、実技講習の場面です。初めて組台に向かう人、

今までに使用したことのない組台に挑む人などさまざま、楽しげに、また、奮闘しながらなっていました。

■筆者は、当館の羽織紐と帯締めを中心に、「江戸の組紐」という内容でスライド発表をしました。約二〇分の発表は、不慣れで苦手な英語のため、どのようにしたら誤解のないように受け止めていたか、とても心配しました。職人さんが話す奥の深い特別な言い回しなどは、日本語でも困難を伴います。しかし、組紐・羽織紐・帯締め・房・丸台・高台などの用語は、日本語が共通語になっていました。最後に、会場から質問がありました。それは、帯締めの製造工程の毛焼きのことでした。帯締めの仕上げの段階で、帯締めをガスバーナーの火に当てます。その理由はなぜかという質問でした。組み終えたままの帯締めには、産毛のような毛が出ているため、商品としては未完成です。仕上げの大切な部分を日本の職人はしているということを、通訳の方にしていただきました。質問者は、いいところに気を留めていただいたと嬉しくなったものでした。

■会議終了後、二月までの間に三組の外国の方が当館の組紐を閲覧に見えました。わずかな日数の滞在中にありがたいものです。なかには、半日、じっくり組紐を観察し、メモをとる熱心なイギリスの女性がいらっしゃいました。最後に、「これからもきれいに保管して、また見せてください」と言ってお帰りになり、その後、ご丁寧な礼状をいただきました。インターネットの世の中。今頃、組紐作家・研究者間で、豊島区の組紐が話題になっているかもしれません。

*拙稿「ぐみひも」第一回組紐国際会議に参加して「生活と文化」第一七号、二〇〇八年発行を参照して下さい。また、当館収蔵展示室では、寄贈された組紐を、逐次替えながら展示してまいりますので、ご来館下さい。

セピア色の記憶

第20回

知られざる白木屋大塚分店のおはなし

左に示した二枚の写真は、ほぼ同じ地点から撮影した昭和一〇年代と現在（二〇〇八年三月七日）の大塚駅北口付近（北大塚一―一三四）の様子です。地図に示した*印は撮影地点を、↓印は撮影方向を示しています。

上写真（清水建設(株)提供）の建物は、昭和二年（一九三三）五月三二日に竣工した白木屋大塚分店です。見にくいかもしれませんが、建物の右側面には「白木屋」、左側の搭屋部分には「シロキヤ」、正面の懸垂幕には「十五日・十六日・十七日掘出し物大市 三階」、正面玄関上の看板には「暑中御贈答用品大売出し」と記さ



れています。やや「派手」な飾りつけの状況から考えて、新装開店後間もない夏の時期に撮影されたものと思われます。

そもそも白木屋とは、寛文二年（一六六二）に材木商大村彦太郎が江戸日本橋に開業した小間物・呉服を扱う商店でした。明治時代以降は百貨店として経営を拡大していきますが、昭和三年に東横百貨店と合併、同四年には東急百貨店と改称し現在に至っています。

さて、当初の白木屋大塚分店は、昭和四年五月に日本橋本店の飯店舗の廃材を用いて建築され開店します。その後、上写真に示した鉄筋コンクリート造六階建



ての建物が清水組（現清水建設(株)）によって建てられ、しばらくの間営業を続けましたが、戦時中の昭和一九年六月に当局によって接収され、白木屋大塚分店は西栗鴨への移転を余儀なくされます。

この建物は、昭和二〇年四月二三日深夜の空襲により大きな被害を受け、廃墟と化しますが、幸いにも取り壊されることなく、その後大規模な補修・増築工事が施され、昭和三二年に松菱ストアとして再オープンします。そして、同三五年以降は大塚ビルの名で大塚駅前のテナントビルとして現在も使用されています。

白木屋百貨店という点、昭和二二年一



白木屋大塚分店の店内の様子
（清水建設株式会社提供）



二月に日本橋店で発生した日本最初の高層建築物火災がとくくローズアッパレがちですが、豊島区内にも知られざる小史があり、その主人公たる歴史的建造物が、建築後七〇年を経た今もなお使われ続けていることは、特筆してよいのではないのでしょうか。（秋山）

*本欄の記述にあたり、大塚ビルの神野様、および清水建設株式会社総務部・広報部から格別のご協力を賜りました。記して謝意を表します。



研究紀要『生活と文化』第17号
を販売しています。

きんぷく&フォーフェスタ2008



プレ展示「池袋モンパルナス
—描かれた風景 写された風景—」



二月一六日、西池袋の区立勤労福祉会館（きんぷく）の主催で、としま未来文化財団・男女平等推進センター・区民ひろば西池袋・郷土資料館・上り屋敷町会の共催、NPO法人ゼファー池袋まちづくり・としま人材クラブの協力により、作品展示会、演奏会、映画上映会、スタンプラリーなど様々なイベントが開催され、多くの利用者が賑わいました。

郷土資料館では、当日展示説明会を行なったほか、「階談話室で二月一日〜二日」まで資料館のPR展示をしました。

三月一日〜五日まで、第3回新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館のプレ展示を行いました。

今回は、当館が所蔵する池袋モンパルナスに居住した画家の作品のうち風景画4点と、同じ時期にその付近を撮影した写真4点のほか、熊谷守一作品3点を展示しました。

◆展示作品：春日部たすく「池袋駅前豊島師範通り」「千川落日」／高山良策「池袋駅東口」／杉浦茂「池袋空襲」／熊谷守一「はげ紅葉」「百日草」「椿」

郷土資料館の調査研究の成果をまとめた紀要ができました。本号では平成一九年二月に亡くなられた元郷土資料館運営委員会委員長・林英夫氏の追悼文二編のほか、論文四編、寄稿論文一編、年報と充実した内容となっています。

◆内容

【林英夫先生を偲んで】
・大島幸夫「まつろわぬ「山賊」の遺徳」
・秋山伸一「やあ! どう? げんき?」をふたたび―林英夫先生の遺志を次代につなぐために―

* * * * *

・横山恵美「東京種子同業組合の設立経緯と活動内容について」
・青木哲夫「一九四五年二月二五日東京空襲(雪天の大火災)小論」

・黒尾和久「試論・画家と戦争記憶―今井繁三郎氏の従軍体験を手がかりに―」
・浜地真実子「地域福祉の基礎を築いた宣教師たち②―リリー・サイバート―」

・福岡直子「くみひも―第一回組紐国際会議に参加して―」

◆価格七〇〇円(郵送も可能です。ご希望の方は下記までご連絡ください。)

編集後記

かたりべ89号をお届けします。

今年も気象庁から桜の開花予想が発表されました。毎年この時期に増えるのが「ソメイヨシノ」の歴史についての問合せやマスコミ取材です。ソメイヨシノ発祥の地である豊島区では様々なイベントが行なわれますが、当館でも常設展示のほかに「花見の名所」のミニ展示を行なっています。桜だけでなく、ツツジもまた歴史のある豊島区ゆかりの花です。お花見のついでに、ソメイヨシノやツツジのルーツをたずねて郷土資料館に足を運んでみませんか。

(よこ)

かたりべ

No.89

2008年3月25日

豊島区立郷土資料館
豊島区西池袋2-37-4

電話 03-3980-2351
http://www.museum.toshima.tokyo.jp